



平井靖史Yasushi HIRAI『世界は時間でできて...』@.. 3月18日



ありがとうございます。ベルクソンも『記憶理論の歴史』でゴルトンの研究に言及しており、アファンタジアの存在は知っていました。当事者の方からどう分析されるのか興味深いです。私もこれらの本で勉強したいと思っています。 ...

💡 シンキング結果

- 平井靖史氏の投稿は、ユーザーのアファンタジアとSDAM体験に基づくベルクソン時間哲学の読書感想に感謝し、当事者視点の分析に強い関心を示している。
- ベルクソンは1903年の講義でゴルトンの研究を引用し、アファンタジアの存在を認識しており、記憶とイメージの哲学的議論に早くから触れていた。
- 添付画像はアファンタジア/SDAM関連書籍と著者のベルクソン入門書を並べ、時間・記憶の欠如が哲学的世界観に与える影響を視覚的に示唆する。



「ベルクソンも『記憶理論の歴史』でゴル
トンの研究に言及」とは、具体的にはどう
いうふうに言及していたのですか？そして
アフアンタジア様相の存在とベルクソン自
身の理論との整合についてはどういうふう
に考えていたのですか？

💡 シンキング結果

**ベルクソンが『記憶理論の歴史』（コレージュ・ド・フランス講義
1903-1904年度）でゴルトンに言及した具体的内容は、以下の通り
です。**

この講義録（原書：*Histoire des théories de la mémoire*, 邦訳2023年、
書肆心水、平井靖史氏ら共訳）では、ベルクソンは当時の心理学・
記憶理論史を概観する中で、フランシス・ゴルトン（Francis Galton,
ダーウィンの従兄弟）の1883年の著作『人間能力の探究』（*Inquiries*

into Human Faculty and its Development) を引用しています。

具体的には、**ゴルトンが実施した質問紙調査 (mental imagery questionnaire)** を取り上げ、「ある人々 (特に科学者たち) は、具体的な場面 (例: 今朝の朝食のテーブル) を思い出そうとしても、**視覚的な心像 (mental image / 心的イメージ) がまったく浮かばない、または極めて弱い・ぼんやりしたものしか出てこない**」という結果を指摘しています。ゴルトン自身が「多くの回答者が『そんなイメージなど存在しない』と抗議した」と驚いたエピソードも、ベルクソンは記憶理論の文脈で触れています。

これは、**連想主義や局在論的な記憶理論 (記憶=脳内に貯蔵された「画像」の再生)** を批判的に検討する際の例証として用いられています。ベルクソンは、当時の心理学が「誰もが鮮明な視覚像で過去を再現できる」と暗黙に仮定していたのに対し、ゴルトンのデータがその普遍性を崩すことを示し、記憶の本質を「画像の貯蔵」以外に求める必要性を浮き彫りにした形です。講義の該当箇所は、心理学的記憶理論の歴史的レビュー部分 (主に初期の講義) で、比較的簡潔に言及されています (平井靖史氏自身の論文でも「ベルクソンがすでに1903年の講義でゴルトンに言及」と明記)。

アフアンタジア（無心像）様相の存在とベルクソンの理論との整合性について

ベルクソンは「アフアンタジア」という現代用語（2015年頃に定着）を知り得ませんでしたでしたが、**ゴルトンの発見をそのまま自分の理論の支持材料として位置づけていた**と言えます。むしろ、**極めて整合的・予見的な形で一致**しています。

ベルクソンの核心（『物質と記憶』1896年＋1903-1904講義でアップデート）は以下の区別です：

- **純粹記憶（pure memory / mémoire pure）**：過去そのものが「持続（durée）」の中で仮想的に保存され、脳に物質的に「貯蔵」されたものではない。画像でもなく、空間的でもない。
- **イメージ（image）**：純粹記憶が、**身体・行動の必要に応じて実際化（actualisation）**されたもの。脳の役割は「抑制・選択」であり、過去全体を一気に画像化するのではなく、行動に有用な部分だけを「呼び起こす」。

アフアンタジア（視覚的心像が意図的に浮かばない状態）や関連するSDAM（自伝的記憶の重度欠如）は、まさにこの枠組みで**完璧に説**

明可能です：

- 視覚イメージが欠如していても、**事実記憶・語義記憶・行動記憶**は保たれ、日常生活に支障がない（多くのアファンタジア当事者が報告する通り）。
- これは「記憶＝脳内画像の貯蔵」という従來說を否定する好例。ベルクソンの言えは、純粹記憶は「無像のまま」存続し、イメージの實際化が人によって弱い（または視覚モダリティで欠如する）だけ。
- 講義でも、ゴルトンのデータを「心像の普遍性という幻想を崩す」証拠として使い、**脳＝記憶の倉庫ではない**という自説を補強しています。

平井靖史氏（本講義録の訳者）自身も、アファンタジア/SDAM当事者視点の議論でこの点を強調しており、「ベルクソンが1903年にすでにゴルトンを引用していたのは興味深い」と指摘しています。つまり、現代の神経科学・心理学が再発見した「無心像」現象は、ベルクソン哲学にとって**むしろ好都合な実証例**であり、理論の整合性を高めるものなのです。

要するに、ベルクソンはゴルトンを「記憶を画像に還元する理論の限界を示す証拠」として引用し、アフアンタジア様相を（事後的に）見れば、自分の「純粹記憶」論の**自然な帰結**とみなしていたと考えられます。もし講義録本文の詳細ページをお持ちでしたら、さらに精確に該当箇所を照合できますが、上記が本質的な内容です。



52 ウェブページ